八王子芸術祭2023 アーティスト対談

2023年9月に、恩方の更に奥、醍醐と呼ばれる地域に400年間自然と共に息づいてきた古民家で、八王子芸術祭の特別展『場所に向き合い　気づき　感じる』が開催されました。この特別展に参加した八王子ゆかりのアーティスト 飯：飯野哲心さん（造形）、竹：竹谷嘉人さん（美術）にお話を伺いました。

――ご自身の活動について教えてください。

飯 僕は彫刻出身なので立体作品をつくることが多いですが、他にも様々な活動をしています。最近はワークショップの仕事も多く、子どもから大人まで皆で家電のねじを外して、解体したもので動物をつくってみよう！ということもしています。

竹 僕は絵にまつわることを全方位でやっています。アパレルのテキスタイルを作る仕事では、実際に身に付けた時の質感なども想像して描き、ライブパフォーマンス時には、最終的に描いた空間がどうなるのかという視点を持って取り組んでいます。

――今に至る原点になっていることは何かありますか？

竹 分野に縛られずに人や場に向けて作られるものは面白いと感じています。〝完成してものになる〟瞬間が好きなので、ただ絵を描くのではなく、絵がどう見られるか、どう使われるかという視点を持って取り組み、それぞれの歴史も感じながら現代的なこともする中で、フィールドを選ばず活動するようになりました。

『long horn road』（飯野さんのXより引用）

飯 子どものころから漫画や特撮ヒーローが好きで、もともと漫画家を目指していました。高校生のときに趣味が合う友達から「子どもっぽいから卒業する」と言われ、好きなのに卒業？とショックでした。〝可愛い〟はいつまでも褒められるのに〝かっこいい〟は幼稚と思われるなんていやだなと。そこで、よく考えたら男子が憧れる〝かっこいい〟世界が美術の世界にはまだ無いなと気付いて。じゃあその世界をつくる人になろう！と思ったのが原点ですね。

――この企画を聞いたとき、どう感じましたか？

飯 僕は学生の期間を恩方で過ごしたので、「これはやるしかない！」と思いました。地元ですが、あそこまで奥には行ったことがなくて、人は来るのだろうかと思いました。

竹 そう。電波も一部繋がらない山深い場所でアートとは、攻めるなと思いました。でも二人とも場所で大喜利するタイプなので、場所が特殊であればあるほど楽しめるなという安心感はありました。

――作品に込めた思いやお互いの作品の印象を教えてください。

飯 僕は赤いゴム塗料を使って5メートルの鹿の角をつくりました。会場の古民家に下見に行ったら、鹿の角が置いてあり、ぎょっとして、でも眺めていたら、角が家系図や風とか水の形にも見えてきて、あの場所でつくるべきものだと思いました。あの部屋に馴染まないけれど調和は取れている、そしてざわっ！と驚かせられるものを目指しました。

『kawa-uo』 展示作品の一部 （竹谷さんのXより引用）

竹 あのでかさとゴム塗料は迫力がありましたね。古民家なのに未来的なものが置いてあるという。つくろうと思っても具現化出来ないものをつくれちゃうから、アーティストだな、ちゃんと〝馬鹿〟出来る人だなと思いました。

飯 竹谷さんは絵の人だと思っていたから、少し怖いような静かで綺麗なあの空間を見て、こういうこともするんだと思いました。光りながら波紋が広がり揺れ動く作品は、とても繊細で。僕とは真逆でした。

竹 真逆ですね。僕もあそこに行って、まず川の中の家だと感じて。和室の静寂と、その奥にある川の水の透明感をマッチさせたものをつくりました。見えない糸で吊った無数の川魚を和室までの導線にして、あとはブラックライトを使って浮かび上がらせるなど工夫をしました。暗い部屋に入る緊張感と、その先では川の音や光が入る緩和を意識しました。3、4日古民家に泊まり込みました！

――改めて八王子芸術祭に参加されたご感想をお願いします。

飯 都心に住んでいる友人が見に来てあの場所を気に入ってくれて、地域を知ってもらうことに少し貢献できたかなと思います。

竹 お客さまに面白いと思ってもらうのはもちろん、会場となった古民家の家主やご家族の方、地域の方々がどう思うかということもすごく大事で。今回準備から制作、片付けまで本当に多大な協力をいただいて、僕もそれに応えるために、古民家を生かした作品づくりに力を注ぎました。その結果、皆さまに喜んでもらえて、成功だったのではないかと思います。

飯 そうですね。あとは演劇、音楽、美術、伝統と盛り沢山な芸術祭って珍しいですよね。期間中全ての企画を制覇する！という方もいて、今までなら見てもらえないはずだった人にも、芸術を届けられている感じがしましたね。

ミライの文化を創り出す、次世代の若者たちの活動を研究するコーナー！

江戸後期から続く八王子車人形を継ぐ若手メンバーの活動にフォーカス！

伝統×革新で文化を紡ぎ、地元から発信を続ける、西川古柳一座　若手座員のチャレンジ

江戸時代の終わり頃に考案された、八王子車人形を現代に受け継ぐ西川古柳座。次世代への伝統芸能の継承が懸念される中、過去最高人数となる8人の若手座員が所属しています。10代から30代前半までの若手座員が、学業や仕事と並行しながら練習を重ね、時に案を出し合ってさまざまな企画を実現。地元八王子の子どもたちや同年代の方にも興味を持ってもらいたいとの思いから、古典芸能のイメージである敷居の高さを感じさせない、斬新な活動によってファンを増やしています。

若手人形遣いの筆頭 西川柳玉（にしかわ りゅうぎょく）さんにインタビュー

西川古柳座の次期家元。舞台での公演のほか、八王子車人形を世界に広めるべく、インターネットを駆使した発信も続けている

――週に1～2回の定期公演は柳玉さんの発案だそうですね。

西川古柳座の稽古場には、八王子車人形の舞台として照明や幕がそろっています。せっかく場所があるので、見てもらう機会そのものを増やしたいと思って始めました。初心者にも親しみやすい構成にしています。また、2月に行った『集大成シリーズ～美味しいとこどり公演～』も若手の発案です。人形の魅力を伝えられるような演目や見せ方を話し合って決めています。

――動画配信も積極的にされています。

舞台活動が制限されてしまったコロナ禍から始めたのですが、真面目なものも、カジュアルな内容のものもあります。動画で八王子車人形を知ったという同年代の方が来てくれるのは嬉しいです。海外からの反応もあるので、字幕を付けたりもしてみたいですね。

重要無形民俗文化財『八王子車人形』とは？

かつて人形浄瑠璃では3人で操作していた人形を、『ろくろ車』と呼ばれる車輪付きの箱を使うことにより1人で演じる人形芝居です。江戸末期に初代西川古柳が考案し、令和4年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。五代目率いる西川古柳座は国内外で公演を行っています。

ココがスゴイ

「まずは地元の人に親しんでほしいですね」と話す柳玉さん。定期公演は解説付きで、行う回数も多いため、思い立った時に見に行きやすいのが魅力。動画やSNSで発信するパフォーマンスは、古典演目からコミカルなコント風、チャレンジ動画まで、さまざまな角度で人形の魅力を届けています。伝統芸能の裾野を広げる積極的な活動がスゴイ！

八王子車人形を間近で体験 西川古柳座の情報をチェック！

国内外で公演を行う西川古柳座。公演情報は一座の公式ホームページや柳玉さんのSNSで公開しています。
また、定期公演の日程と演目もその月によって変動があるため、まずはスケジュールを確認ください！

八王子車人形ホームページ

西川柳玉Xページ